



## ■主な内容

- ・「関東大震災 100 年を前に復興の歴史から学ぶ」を聞いて
- ・特集：住まいをまちに開いて 10 年  
 在林館は 10 周年一開くことと語り継ぐこと  
 まちの縁側 10 年余りの軌跡
- ・会員掲載の本『建築ジャーナル特集 女性建築家の歴史』を読んで
- ・会員の本『自然災害に備えて住まいづくりの勘どころ』を発売
- ・TOPIC

関東大震災後、修繕補強を含め 576 橋が架けられた。永代橋と、清洲橋は隅田川に建設された。(武村雅之(2019)著『東京都における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構』その1より)



## 安藤 照代 ANDO Teruyo

### 「関東大震災 100 年を前に復興の歴史から学ぶ」を聞いて 'Learning from the history of reconstruction ahead of the 100th anniversary of the Great Kanto Earthquake'



講師：武村 雅之氏  
 (名古屋大学減災連携研究センター 特任教授)

2022 年 11 月 19 日、第 2 回オンライン講演会が開かれ、名古屋よりオンラインで武村雅之先生の講演をお届けした。会員 20 名、一般 11 名の参加があり、アンド建築設計室・安藤照代さんに原稿をお願いした(編集委員)。

国内では関東大震災の記録は無いとされていたが 1992 (平成 4) 年 12 月 15 日岐阜地方気象台で記録が見つかり、そこには本震と 2 度の余震が記録されていた。「その記録は自分が地震学者であるがゆえに見つけられた」と武村雅之先生は話され、そこから武村先生の関東大震災への研究が始まった。

江戸時代、隅田川には千住大橋だけが架かり、隅田川の東側は低湿地で人が住むには適していなかった。

1657(明暦 3)年 3 月 2 日～3 日明暦の大火が起きた。大火後、両国橋が架けられ幕府は東側を開拓し、そこに武家の下屋敷を移転させ、庶民もそこに住ませた。

1703 (元禄 16) 年 12 月 31 日元禄地震が起きた。震源地、震度は関東大震災に匹敵するものであった。

明治維新後、隅田川の東側の土地は軟弱地盤であったが、安価であったため、様々な工場が建ち人々の集中を招いた。1923 (大正 12) 年 9 月 1 日関東大震災が起き、軟弱地盤上の建物は倒壊、延焼し大勢の犠牲者を出した。翌日、山本内閣が成立し、後藤新平内相が我が国に相応しい新都を建設すると「帝都復興事業案」を提案し、耐震耐火構造

の同潤会アパートや隅田川に多くの鉄製の品格のある橋、学校付設小公園、将来道路下に地下鉄を敷設できる広幅員の道路を作った。また、後藤新平の理想は戦後「名古屋市復興計画」の基本になっていった。

2011 (平成 23) 年 3 月 11 日東日本大震災が起きた。翌日私は歩道にビルの外壁のカーテンウォールのボルトがばらばらと落ちているのを見てゾッとしました。私たちが安全だと思っていた風景は地震で一変してしまいました。

高層群の都心は未曾有なビル風によって火災旋風が発生するのではないかと。地震災害を正確に予測することは現在でも困難な状況であるが、過去の地震災害に学び機能性だけでなく災害に強い品格ある「首都」東京の実現に向けて取り組み続ける必要がある。

右図：復興道路  
 東京は帝都復興を目指す、主要道路は自動車の往来だけでなく、地下鉄の敷設を想定し、復員を 22m 以上に広げ建設した。(武村雅之(2020)著『東京都における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構』その2より)



## 第 31 回 UIFA JAPON 2023 年度総会および記念講演会のご案内 31st UIFA JAPON General Meeting and Commemorative Lecture

今年是对面とオンラインの併用形式による開催となります。

日 時：2023 年 6 月 17 日 (土) 総会 13:30~14:30 記念講演会 15:00~16:45

会 場：としまち研会議室 (東京都千代田区神田東松下町 33COMS HOUSE2F)

記念講演：「複合災害時代に備える災害につよい家とは「どんな家」」 中林 一樹氏 (東京都立大学名誉教授)



ありりんかん  
**在林館は10周年—開くことと語り継ぐこと 在塚 礼子**  
 10 Years Growing with ARIRIN—KAN ARIZUKA Reiko

このニューズレター(No.94)に“地域の休み石として、また、記憶の継承の基地として、在林館を育てていきたい”と書いて10年になる。在林館とは、私の住まいのうち、母が最期を過ごした小さな2室の名である。

**地域の「休み石」としての10年**

開くといっても、毎週木曜日の午後のみ。来られる方はおのずと限られる。開いていることを広く伝える方法は、ささやかなブログに最低限の情報のみとし、チラシを近くの図書館やカフェに置いていただくことや、町内会の掲示板に貼らせていただくことにとどめた。まちの休み石らしく。来られた方はゆっくりして下さる。あまり大勢来ていただくことは望まなかった。

それでも、ふと発見してくださり、次にはご友人やご家族を誘って来られる、という風にして知られていった。10周年記念の自画像展には30近い個性あふれる作品が集まり、音楽会では多彩な演奏が繰り広げられた。

10年の終盤はコロナ禍。散歩途中のひと休みの場所にしていただけたらと、ほとんど閉館しなかったが、さすがに来館者は減った。月に一度の“書の会”は継続。春秋に本を手作りする“リブクラブ”はようやく再開。月一度の水彩画の講評会“アリリンアート”と企画展のテーマごとに開いていたギャラリートークは復活しないままとなっている。

道から奥まっている在林館はちょっと入りにくい。門の脇のポスターを見て楽しむのみという方もおられる。入らずともひと休みしていただければと、生垣を伐り開いて“ほんとうの休み石”を工事中。これも10周年記念事業といったところだ。

**地域の記憶を継承する基地としての10年**

記憶の中心は在林館が立地する代田橋分譲地。90年の歴史がある。企画展を重ねるうち、転出した方々からもご協力を得られて、昔の写真やエピソードが集まっている。ランドマークだった洋画家のアトリエが山田醇じゅんの設計だったこともそのひとつ。

近隣の失われていくものを惜しむテーマが多くなる。建て替えが始まった「和田堀給水所と私展」、8年後「ハネギウス一世と和田堀給水所」、統合されて廃校となる「守山小学校と私展」、5年後「ダイダラボッチと守山小学校」、コンビニになってしまう「百瀬医院—遠藤新の建築」など、思い出を語りながら、人々にとっての保存の意味を考える機会ともなった。

記憶は生活の中の品々にも宿っている。古い家具や什器も懐かしがっていただき、祖父の浮世絵や絵葉書旅日記、毎年のクリスマス飾りや雛飾りを繰り返すうち、ご近所の方からもご自分の大切なお雛様をここに飾って、などのお申し出をいただくようになった。

世の中の変化を憂い企画した「みる・きく・かたる戦争の時代」。守山小学校生徒の疎開、避難所となった百瀬医院、隣近所の方々が疎開先からやり取りした手紙など、それまでの企画展がひとつつながりになった。



「住みつづけて90年代田橋分譲地の今昔」展(2023年6月15日まで開催中)の前で  
 (写真：板東)

**もうひとつの開く意味**

世田谷区の防災マップでこの地域が火災危険度の最も高い地区として真赤に塗られていることに驚き、早速「羽根木のまちの防災展」。まちづくりセンターの防災担当者や防災を担う近隣町会の方々などと座談会を開き、先進地域に学び、防災マップ作成など。

もともと防災は住まいを開いた動機とかかわりがある。その昔、西ドイツの高齢者住宅基準に“居間の窓がひとつ道に面していること”とあって感心した。交流とともに緊急時の避難のための窓。近隣関係が防災の基本なのだから。

**これからのこと**

開く時から予定していたテーマ、降ってわいたようなテーマ、テーマから生まれるテーマ、この、時に応じて対処できる自由さがよかった。ギャラリーらしく絵画や書も展示したが、母親に誘われて来た中学生が古地図を熱心に読み取って“ミュージアムみたい”と。確かに10年の活動はむしろ“まちのミュージアム”がふさわしい。サロンのよう、カルチャーセンターのよう、などとも評された。なにもものでもないその自由さを楽しんできた。

これからは“育てる”というより“継続する”ことを目標にしよう。過去の展示を見たいと言われるし、これまでの企画展を活かした展示を続けながら、収集した情報、いただいた情報を記録に残していこう。開館日を少し増やすこと、おいしいコーヒーが飲めるようにするのはどうだろうか。



2018年  
 「戦争の時代展」座談会



2014年春  
 在林館アプローチ



まちの縁側 10年余りの軌跡 稲垣 弘子  
Over 10 Years on the Town's Engawa\* INAGAKI Hiroko

「まちの縁側 そよご」を我が家の庭に開いたのは、東日本大震災後の2011年5月です。

月に1回開きながら、早いもので、12年が過ぎようとしています。

**全員が積極的に参加**

初回から参加されていた方の中には、家族との同居で転居、高齢者施設に入居、亡くなる等で、現在、90代は2名。酸素ボンベを携えながら歩いて毎月参加されている方もいます。近くに楽しめる場所があることの必要性を痛感しています。

始めた頃は、準備・片付けは世話役の3人で行っていましたが、参加者もお茶や椅子の準備など手伝ってくれるようになり、今ではテントの片付けまで全員ですようになりました。いつも参加される方が現れないと「ちょっと呼びに行ってくる」と迎えに行く人もいます。災害時、きつと安否確認や避難補助をしてくれるでしょう。全員が受け身ではなく、積極的に参加するようになっています。

**靴をはいたままで気軽に参加**

戸外での活動は、暑さ、寒さ対策が必要です。夏はテントを日除けに、冬は、テント側面にも膜をはり、風よけにして、電気ストーブ2台で暖を取っています。暑さ、寒さよりも靴をはいたまま参加できる気軽さが重視されています。買い物帰りやジョギング、赤ちゃんのお散歩途中にお茶を飲んでいく人、夏休みの子供も覗きに來るなど、思わぬ出会いがあり、世代間交流も自然にできることは、何よりも戸外である「縁側」の良さでしょう。

**外の世界にも目を向けて学びあう**

年に3回講座を開いています。囲碁講座、手芸講座、生活講座です。最初は専門家をお願いしていましたが、最近ではそれぞれ得意とする人が講師を務めます。生活講座では、海外旅行で垣間見た世界の人々の暮らしの紹介や被災地での活動や自然災害への備えについて、紙芝居形式で話をし、外の世界へも関心を持つ機会にしています。

ここで地震が起きたら、「近所の農家の井戸を借りて、この場所で炊き出しができそう」とか「トイレが使えなくなった時の、応急トイレの作り方」など、自然に防災の話をし、関心を高めるようにして、防災訓練への参加呼びかけもしています。

**多くの方の支援で継続**

いつの間にか歳月が過ぎたように思えますが、様々な方々の援助があったからこそ、継続しているのだと思います。

まず1つ目は、助成金です。最初の1年は自前でしたが、2年目、3年目は港北区の「地域のチカラ応援事業」の助成を受けました。4年目から現在まで、港北区社会福祉協議会の「ふれあい助成金」を受けています。茶菓代は参加者の負担ですが、参加費は低く抑えることができます。

2つ目は外部からの来訪者です。地域ケアプラザの職員が時々参加して、高齢者の状況把握をしながら広報紙(右図上参照)に活動を載せたり、雑誌社が取材に來たり、隣町から「まちの縁側」を開きたいのでと見学に來たりします。港北区のイベント「オープンガーデン」の時に



コロナに厚着して、フラワーボット作りと囲碁(筆者:左)

は、参加者が庭を見て回っている時にちょっと休憩できる「お接待」の場として茶菓の提供をしています。そこで、旧友に逢ったり、全く知らない人と会話が始まったりと多くの人と接する機会になっています。

3つ目は、共同運営者がいることです。私が参加出来なくても、鍵のない庭の収納庫にお茶道具や文房具などを揃えてあるので、「まちの縁側」は開催できます。仲間の存在は心強いです。台風や大雨でもない限り、開いています。

小さな「まちの縁側」も多くの人に支えられながら、続けてこられました。

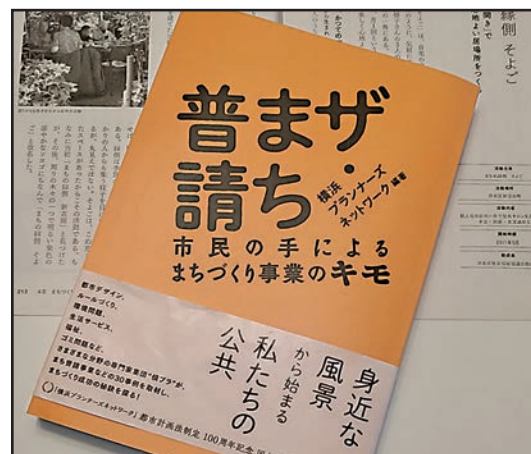
気軽に楽しく過ごす機会が近くに定期的にあることや自然な世代間の交流は、体力の衰えを感じる高齢者にとって、日々の生きる力になり、地域住民としての自覚や誇りにつながると感じています。顔を合わせ、話をすることで、お互いを思いやる気持ちも生まれ、自然と互助の心も育ちます。

コロナ禍、2~3年外部の人との交流が閉ざされていましたが、少しずつ復活し、近隣の多くの人と交流する機会を増やし、更に輪が広がって行くことを願っています。

\*Engawa is a traditional wooden space on the edges of the Japanese houses as a service of casual meeting space for interaction or works.



時々訪れる地域ケアプラザ職員が取材



2019年12月発行「ザ・まち普請」に掲載  
編著:特定非営利活動法人横浜プランナーズネットワーク ザ・まち普請編集委員会(都市計画法制定100周年記念国土交通大臣表彰受賞)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@liql.co.jp

URL: http://uifa-japon.com

発行 2023年4月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
OF QUANTITY OF LIFE  
DAINI-OSHIDA BLDG.  
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861

FAX :+81-3-5275-7866

URL :http://uifa-japon.com

## 会員掲載の本

『建築ジャーナル特集 女性建築家の歴史』を読んで  
Special Magazine Feature on Women Architects  
宮本 伸子 MIYAMOTO Nobuko建築ジャーナル 2023年2月号  
の表紙

UIFA JAPON では、2011 年に開いた「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像」展以降、草創期の女性建築家についての調査・研究を継続している。

この程、女性建築家の歴史をテーマとした雑誌の特集が、2023 年の2月号として発刊された。その中で UIFA JAPON の会員が4人も登場し、他のところでは知ることが出来ない日本の女性建築家の来歴を知ることができて興味深く読んだ。松川淳子相談役は「女性建築家の登場とその背景」と題して日本の草創期の女性建築家や建築教育と女性の歴史などについて解説されている。また、インタビューに応える形で、小川信子名誉会長は大学時代から実務を経て日本女子大学の教授になるまでを、正宗量子相談役は台所の役割にこだわる建築家としての主張を、岸本裕子副会長は夫君の母である近藤洋子氏のエピソードを語っておられる。

草創期の女性建築家の歩みに触れ、未だに建築を志す女性へのハードルが存在する日本の建築界の昨今が気になった。

## 会員の本

『自然災害に備えて住まいづくりの勘どころ』を発刊  
Booklet on Securing Homes Against Natural Disasters  
板東みさ子 BANDO Misako

UIFA JAPON の会員で作成した、文も挿絵も会員の手によるこの冊子は、足掛け3年を経て、2023年3月によく発刊するに至った。

冊子作りの目的は、中越地震以来の被災地支援での住宅相談の経験から、面談では伝えきれない内容も、冊子として渡せば、安全で安心して住み続けられる住まいを自ら考える手助けになり、また多くの人にも届けられるということだ。

2021年7月～9月に会員へのアンケート調査。10月～2022年3月にかけて約10名の編集グループ\*を結成し、回答内容を集計整理、不明点の問い合わせや確認をした。一方、2022年5月に建築技術教育普及センター助成採択事業へ応募し、8月に採択通知を受け取った。予算も把握しつつ作業を進め、情報の追加・見直し、項目の整理や文章・挿絵の配置、冊子の大きさ・体裁など、多くの人が手取りやすいものになるよう繰り返し検討をした。打合せ(コロナ禍中でオンライン会議)は2023年3月まで幾度も重ね、最終段階では週に複数回行われた。

編集グループ\*は、専門分野ゆえのこだわり・専門外の人にも伝わる表現の模索・各人のこだわりの箇所の相違・各々の日常業務との調整など、多くの課題をこなし、その個性や能力を十分に発揮した。激論が飛び交う場面も多々あった。会員外では、DPTを朝倉恵美子氏に依頼。小林一樹氏には素案を通読の上、助言をいただいた。

私は、仲間の多彩な才能・情報収集力・粘り強さ・実行力に感服しつつ、この冊子が広く活かされることを願っている。

\*井出幸子 / 伊藤京子 / 稲垣弘子 / 上田壽子 / 薄井温子 / 加部千賀子 / 谷村留都 / 板東みさ子 / 松川淳子 / 宮本伸子



会員の知恵を集めて完成

## TOPIC

UIFA JAPON の元会員の故山田規矩子さん(写真右)の妹さんである古野恭代さん(写真左)のご遺族の方から、多額の寄付を頂戴しました。感謝の意を表し「古野さん基金」として大事に海外の活動に使わせていただきたいと思います。(森田美紀 UIFA JAPON 会長)

2010年UIFAソウル大会の  
山田・古野姉妹

## ■役員会報告

## 2022年度第5回 2023年1月11日

オンライン会議：会費収納について会計報告／第2回オンライン講演会報告／被災地支援提案 / IAWA からの提案への参加審議 / 『住まいづくりの勘どころ』進捗報告 / NL124号企画報告 / NL123号発刊報告

## 2022年度第6回 2023年3月17日

オンライン会議：ホームページリニューアル報告 / 岩泉町小本訪問報告 / 『住まいづくりの勘どころ』報告 / 総会の予定と講演会決定 / 「古野さん基金」設立 / NL124号進捗報告

## ■編集委員から一ひとこと

4月から短縮勤務でゆとりあり？なぜか今日も会議あり(宮本) / 春が来て、一人暮らしが嬉しい娘と大阪での拠点が出来て嬉しい私(杉原) / 春から畳の学校が再開です！(薄井) / 昨日お江戸深川桜まつりが終了。20年前から3週間の土日開催で、初年度は一輪も咲かなかったのが、最近は開催時期が早くなる一方。地球温暖化のせいでしょうか(須永) / 最近“老兵は死なずただ消えゆくのみ”と思いつつ新緑を楽しんでいます(渡邊) / 探し物を諦めた頃に思いもよらない場所で発見。自分がやったに違いないが、全く記憶がない情けなさ(神村) / 見ずに逝った人たちを振り返る桜の季節です(井出、編集長)